

無限の遅滞

往來を行きかうひとびとのなかで、僕は背中に大きな石を背負って立ちつくしている。

無残な疲労と激しい苦痛のために、もはや一步もあるけない。僕は腰をおとして必死に重圧を耐えるのだが、しびれる腕を背中にまわし、石がずりおちてしまわないよう満身の力でささえているのだ。かたわらを行き来するひとびとは、この光景が格別注意にあたいしないものであるかのように、無表情に通りすぎて行く。やがて僕の全身は機械のようにぶるぶると震えだし、ひざを折り、地面にべったりと腹をつけ、歯をかみくだいた顔は天にのけぞらせ、そうして両手を背中にまわしたまま、くたばるのだ。

誰によって負わされたわけでもないこの責任は、どれだけ忠実に履行したところで、誰もなにも報いはしない。

僕は無限に遅滞する。

これをかりに宿命とよんだところで、そうすればすこしは諦めがつきやすいかというまでのことだ。だが実のところ、宿命であろうとなかろうと、石が背中に食いこみ、骨をきしませる苦痛以外、僕はなにも信じられなくなっている。

けっしてあいまいには語るまい。まして僕はいま内部の抵抗しがたい確実さに衝きうごかされて書くのであってみれば。そしてこの確実さをなにもましてふさわしく、自由とよぶとき、自由とは孤独な責任にほかならないのである。

のがれようもなくおのれ自身であること、この烙印を僕は生涯ぬぐい消すことができない。僕をすべての他人から隔てるはてしのない距離と深さの奈落をのぞきこむとき、自由の呪いにおもわず僕はめまいする。

自由とは他者との無限の懸隔なのだ。

死、それはひとつの他者である。だから僕が自由であるかぎり、他者との懸隔をどこまでも固持するかぎり、死にへつらい、死と慣れあうわけにはいかないのだ。

敬虔なる信者は死の凶暴をなだめ、死と慣れしたしむために、あらゆるでだてをつくすだろう。その繊細な神経は、生命の真昼の明るさが死と織りなすコントラストの強さに耐えられない。生を死臭で満たして、死との境界をあいまいにする。いつも心の部屋を暗く

して、ある夜突然やってくる死をまるで旧知の友のように出迎える準備をする。そして死がうむをいわさず拉っし去るとき、別の世の幸福を夢見て、静かに目をとじる。

かたや倦むことを知らぬ現世主義者は、この世の生とひきかえに来世の幸福を夢想するといった陰険な快樂にふけることをしない。一回きりの現世を最大限に生きぬこうとするこの男にとって、かぎりある貴重な時間を来世の祈りに費やすことくらいばかげたことはない。この男がもっとも愛するのは真昼の生の最高度の充実感であり、なによりも恐れているのは最後の後悔である。

だが希望はなく、つねに悔いは残るのだ。死にたいするいっさいの準備を放棄しなければならぬ。

実際のところ人間は死と隣あわせに生きてなどいない。人間のもちあわせている時間は未来に向かってぶよぶよとのび、先のほうはまったくぼやけてしまっていて、それが一点でとぎれているということは、どうしてもないのだ。人間は死すべき存在ではない。どこまでも生き延びる存在である。

死を等閑に付すべきだ。それはちょうど他人に媚びてはならないように。僕はひとり自分にたいして覚悟しなければならない。死も僕にかわってこの僕をひきうけはしないから。

泥酔者は死んだあとも、アルコールと尿と死臭のしみついた肉体を冷たい路上にさらしている。そのとき肉体は勝ち誇り、死の無力を告知するのだ。

肉体が死にたいして己の存在の堅い核に凝結するように、僕の全存在は僕自身の核へと凝縮する。

かくして僕は他者とのまつわりを引き裂かずにはおかない。孤独の懸崖にみずからを駆りたてねばならぬ。

(1976年4月)